秋来南向飛　　秋来たれば南に向かって飛ぶ。

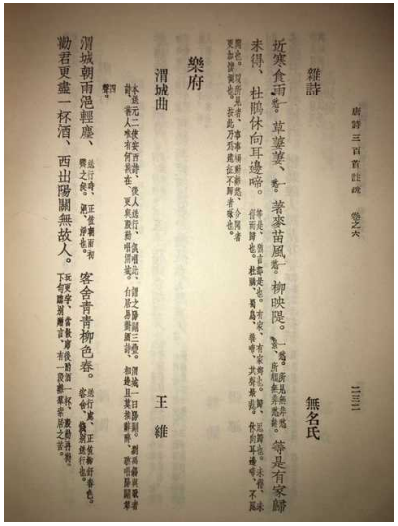
さて、陽関三畳である。授業の詩文はできるだけ原典にあたってみる。この詩は『唐詩三百首』にある。『唐詩三百首注疏』には、楽府「渭城曲」とあり、注には「本送元二使安西詩、後人送行、俱唱此、謂之陽関三畳。」とある。劉禹錫や白居易がその後引かれており、唐代から人口に膾炙していたことがうかがわれる。

漢詩に地名があれば、授業では生徒が想像できるような工夫ができればいい。実際に行ってみるのもいいと思う。稿者は、かつて成都から空路ウルムチへ入り、ウルムチからトルファンまで砂漠を車で走ったことがある。火焔山を過ぎ、オアシスに着いたときには、ほっとしたのを覚えている。安西はそのトルファンからさらに西に向かった所に位置する。

おわりに

学ぶと思うは一体である。書物を読み師について学び、そして自ら思索する。その二つの営みが授業を作るベースであり、実際の授業では生徒との対話によってそれが顕在化する。王維のこの詩は「陽関三畳」としてあまりも有名であるが、生徒たちにとっては、単なる漢詩に過ぎない。時間が経過し、親しい友人との別れにあって初めてこの詩が実感される。しかし、十代に出会った言葉の衝撃は、実体験とは異なる形で深く心に残る。

文学は真理を求め、教育は幸福を実現する方法であると思う。生徒と共に楽しく授業を創造することができればいい。なお、「言は意を尽くさず」は、この詩を読んでの率直な思いである。だからこそ、この詩は愛されるのだろう。


唐詩三百首註疏　卷之六

雜詩　　無名氏

近寒食雨雪、並草萋萋、雪、著客苗風雪。柳映隄。一隄、所組無所飛鳥、等是有客歸未得、杜鵑休向耳邊啼。得所歸也。杜鵑啼、今聞者聞也。聞所思者、事事傾新鮮、今聞者更加聞新也。故起乃不起、起不解者客也。

樂府

渭城曲　　王維

本送元二安西詩、後人送行、俱唱此、謂之陽關三疊。渭城一日朝雨、卽是且莫飲酒、卽是莫唱。劉禹錫詩、聽唱陽關淚滿衣。白居易詩、勸君更盡一杯酒、西出陽關無故人。

渭城朝雨浥輕塵、送行者、輕塵之地、況朝雨乎。客舍青青柳色新。客舍青青柳色春。送行者、客舍青青柳色也。

勸君更盡一杯酒、西出陽關無故人。下句離別難言。有一段難捨難離之意。

【参考書】

蘅塘退士『唐詩三百首註疏』
森野繁夫『漢文の教材研究』第五冊漢詩編（二）
　　渓水社
入谷仙介『王維研究』創文社
入谷仙介『陽関に故人無からん』筑摩書房
『新編　東洋史辞典』京大東洋史辞典編纂会編

【授業のヒント】

発問の工夫―『論語』郷党「廄焚」

薄井信治

良い発問は授業を活性化する。逆に言えば、授業を活性化するための発問が良い発問である。授業を活性化するとは、生徒たちに自主的に考えさせ、言葉として発信させるということだ。そのためには発問を工夫する必要がある。工夫の一つとして、状況を考えさせる発問がある。

状況を考え、想像できるようになると、生徒の頭の中で、作品はよりリアルなものになっていく。リアルなものになるほど、ほんのちょっとした違和感などから、頭の中には疑問が湧いてくる。その疑問は自主的に考えるうちに生まれたものである。生徒に疑問を考えさせるのである。そうすれば、授業は活き活きとしたものになる可能性が大きくなる。

しかし、「状況を想像しなさい」と言っても、ほとんどの生徒は状況を想像できない。想像するきっかけを与える必要がある。それこそが、状況を考えさせるための発問である。

そろそろ具体的な教材を取り上げることにしよう。『論語』「郷党」篇の一つを教材として取り上げる。

廄焚。子退朝曰、「傷人乎。」不問馬。

（廄焚けたり。子朝より退きて曰はく、「人を傷へりや。」と。馬を問はず。）

この文章を使って、生徒に状況を考えさせる発問を作ってみよう。短い文章なので、かなり想像しなければ状況は見えてこない。

（1）生徒に火事の状況を考えさせる。

【発問1】「廄焚。」とあるが、馬屋の火事はどの程度のものなのか。

『論語』の文章では火事の規模が分からない。小火程度なのだろうか、全体が丸焼けになったのだろうか、はっきりしない。火事の規模で人々の動きは変わってくる。小火程度の火事ならば、孔子が「傷人乎」とわざわざ聞かないだろうから、もっと火事は大きかったはずだ。丸焼けになるくらいの火事ならば、火事の後の臭いが残っているだろう。孔子はその臭いをかいで、火事について問いただしたかも知れない。とはいえ、生徒に臭いを想像させるのは難しい。火事の現場や消火作業の跡を経験した生徒がいれば、彼らの発言から想像できるだろうけれども。

（2）火事の状況を考えることで、孔子が火事の被害についての報告を聞いたことが省略されているのに気づかせる。

【発問2】孔子はいつ馬屋の火事について知ったのだろうか。

孔子がいつ馬屋の火事について知ったのかも、『論語』の文章からは分からない。朝廷から帰って来てからだと分かるだけである。孔子が馬車に乗って帰って来た時、孔子自身が馬屋に行くことはない。孔子が馬屋に行かなかったということも確認しておきたい。馬屋が離れた場所にあったのならば、火事の後のくすぶった煙や臭いに気づかなかった可能性が大きい。報告がなければ、火事があったということに気づかないかも知れない。

生徒の答えは次のようなものだろう。

・騒ぎがあったので気づいた。

・孔子が朝廷から帰った時に聞いた。

孔子が普段と違う雰囲気から自ら気づいた場合でも、気づかなかった場合でも、馬屋の火事について報告があったことは間違いないだろう。『論語』の本文で「傷人乎」と尋ねたのは、報告を聞いたからだ。

（3）この文章では、孔子が聞いたはずの馬屋の火事の報告が省略されている。省略されている部分を想像させる。孔子が報告を聞いたということを想像した後は、その内容も想像させるのである。

【発問3】孔子が聞いた馬屋の火事についての報告はどのようなものだったのだろうか。

ただ火事があった、というのでは報告として不十分であることを確認しておきたい。報告は「自分が報告したいこと」ではなく、「相手が報告されたいこと」を考えてしなくてはならない。この場合、火事があったという事実だけではなく、火事の被害状況について報告がなければ、本当の報告とは言えないはずである。

この場合の被害状況とは何だろうか。被害状況の中には馬屋の建物とそこにいた馬のことが含まれる。馬には高い価値があることを確認しておけば、被害状況の報告に馬についての報告が含まれる可能性が大きいことが想像できる。

（4）孔子が「傷人乎」と聞いたのは、馬屋の火事の報告の後である。報告の内容についてはすでに考察した。報告を聞いた上で「傷人乎」と尋ねた理由を考えさせる。

【発問4】孔子はなぜ「傷人乎」と聞いたのだろうか。

これまでの発問によって想像を働かせた生徒は、次のように答えるだろう。

・馬のことはすでに報告があったので、報告になかった人々のことを心配したから。

この「人」とは馬小屋で働く使用人のことである。使用人の無事を孔子が心配しているということを確認しておく。

（5）本文中に「不問馬」とあるのはどうしてか、ということを考えさせる。孔子が馬についての報告を受けていなかったことも考えられる。しかし、今までのように状況を考えると、火事のあった当時、報告のあったその場にいた人は孔子が馬のことを聞いているのを知っていたと考えられる。

【発問5】本文に「不問馬」とあるのはなぜか。

孔子が馬について報告を受けていないとすれば、生徒の答えは次のようになる。

・孔子は貴重な乗り物を牽く馬の心配するよりも、その周囲にいた人々の安否を気遣っているから。

これまでの発問で想像していった生徒は、次のように答えるかもしれない。

・孔子は「馬」が無事だったという報告を受けたので、それ以上馬のことを問わずに「人」のことを心配したから。

・孔子は「馬」はダメだったという報告を受けたので、それ以上馬のことを問わずに、せめて「人」は大丈夫だったかと心配したから。

以上の二例は、「不問馬」を「それ以上馬のことを問わずに」という解釈をしており、少し不自然だ。

次のような答えもあるだろう。

・孔子は火事の報告を受けているので、今さら馬のことを聞くことはないのだが、「不問馬」とあることで「傷人乎」という孔子の言葉が強調される。あえて「馬」のことを出すことで、「人」のことも孔子が重んじていることを表していると考えられるから。

状況を想像することによって、作品は生徒にとってリアルなものになり、疑問が次々に生まれ、さまざまな可能性を考えるようになるだろう。

学習者の国語力を育成するための漢字・漢文学習

―地域の漢文資源活用を目指して―

北川昌生

一　はじめに

兵庫県立伊和高等学校は、兵庫県宍粟市にある全日制普通科の高等学校で、各学年二クラスの小規模校である。

生徒の多くは、学習、部活動、生徒会活動、学校行事などの教育活動に積極的に取り組んでいる。しかし、中には自己肯定感や目的意識、コミュニケーション能力が低く、学校生活にうまく適応できない者がいる。このような生徒は、学習に身が入らず、さまざまな活動においても消極的な姿勢で取り組む者が多い。

今回、担当するクラスの生徒も同じような状況で、積極的に学習に取り組もうとする生徒がいる一方で、学習意欲が低く、授業に集中できずにただ座っているだけの生徒も少なからずいる。

そして、学習意欲の有無に関わらず、多くの生徒に共通していることは、基本的な学力が定着しておらず、基礎となる漢字の読み書きにも苦労している者が非常に多い、ということである。

たとえば、漢字の小テストを行う際、前後の文脈から漢字を連想したり、漢字の持つ意味を考えたりしながら答えを導き出すのではなく、自分が知っている漢字の中で、その音に当てはまる漢字をとりあえず書く、という生徒が多い。

このような生徒に対して、漢字の持つ意味をしっかりと考えさせることで、国語の基礎となる力を育成することができないだろうか、と考えた。

また、今回、担当するクラスの生徒は、就職を希望している生徒が大半である。就職希望以外の生徒は、短期大学や専門学校への進学を希望する生徒である。そのため、受験において漢文を必要とする生徒はいない。

そこで、今回の実践では、二つの視点から実践を行うこととした。一つ目は「生徒の国語力の向上に向けた漢字・漢文学習」である。これは、これまでも多くの実践